

ノイローゼ 考えが1カ所に停滞し先に進まぬのもノイローゼの一つの症状ではないかと思うのだが、雲鏡欄も2巻10号で48のテーマがとりあげられたので、全部をよみかえしてみると、少しノイローゼ的なところが感ぜられぬでもない。全部をはっきり分類することは困難だが、研究態度や技術のあり方をとり上げたものが半分以上、興味ある気象に関連した現象のクリチックが約1/4、気象台のポリシー批判が約1/8、その他は原水爆、原子力問題、科学史に関連したものとなっている。

お説教的なものが多く、疑問形や問いかけの文章がたいへん少いのは文章のスタイルにもよることながら、やはり視角や発想形式の固定化が原因しているのではないか、文章のにつめ方も足りないように思う。600字という制限は和歌や俳句にくらべたら、それこそ無限の天地だ。辞典をつくった経験のある人は始めに長く書いた文章が、けずってゆく面白さほど、どんどん短くなってゆくことはよく御存知のことであろう。あまりにつめてしまって何が何やらわからぬものになってしまってもこまるが、雲鏡欄に限らず気象の論文はこのにつめ方が不足しているのではないか。字数の制限におびえて一つのテーマをこねまわすからノイローゼ的になるのではないか。どうしてもスペースがせまいというなら四つの欄を意識的に有機的にむすびつけてトリオやクワルテットをやってみたら面白いのではないだろうか。(N)

投書 ある日私あてに某市の未知の少年から封書が届いた。字と文章から見て小学校5年か6年。内容はこうである。

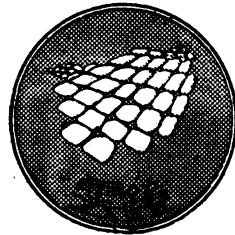
「私達は気象台の先生達が苦労していることを感謝する。私は明治以来の台風の研究をしたいから、明治以来の台風の名前と被害を表に書いて送ってくれ。それから、ついでに日本全国の霜、雪について、初日と終日を調べて表にして送ってくれ」。こう書いてあった。随分人をばかにした手紙だが、相手は子供のことゆえ、この表を作って送ることは大変だから、一応どうしたら調べられるか、先生と相談して見なさいと言ってやった。ところがしばらくたって、今度は2人の少年の名で、先生に相談したら象気台に聞けと言うからぜひ知らせてくれ、ついでに富士山で人工降雨の実験をやっているそうだから、その写真もくれと書いてある。私はこの子供にはなく、受持ちの先生にいささか腹を立てて子供に勉強させるのに、こういった資料集めしか手段はないのか、学校で温度を観測するのもよい、吹流して風を測るという研究のやり方もあるではないかと言ってやった。そして返事の末尾にこれらの資料を調べることができる書物と発行所を記入してやった。返事がないところを見ると、この子供たちをけしかけた先生は、自分のやり方にいささか後悔しているのだろうか。(x)

右と左 ある有名なドレス学院の登校時間に、ちょうどその道を逆行して出勤しなければならない男の話。

◀道中いっばいに歩いてくる若い女性群には閉口する。新しい交通規則に従って右側を通ろうとすれば強いレジスタンスを感じる。よほど辛棒強くがんばって、ぶつかりそうになる相手が道をゆずってくれるまで動かないくらいの決心がある。昔からの慣習に従って左側通行をしてやるうとすれば、おそらく右側以上のレジスタンスを受ける。ゆくり時間をかけてもよいだけの余裕があれば、多少いじを張って右でも左でも通って通れないことはない。しかし通勤ともなるとそう間屋はおろさない。しょうがないから道のまん中を通る。まん中だつてレジスタンスはある。そのときの態度がふるってる。相手にぶつかりそうになったら、相手が右によけるか左によけるかを直感的に判断する。そしてひょいひょいと身をひるがえしながらだれにもぶつからないで通りぬけられる。いろいろやってみたけれども、この方法が一番無難だとわかった▶

話は交通道徳の話である。右と左だからといって無理にアナロジカルにうがって考えるのは禁物。そういう道なら願っても歩いてみたいなどとあごをなでるのも禁物。

(い)



ペンギンの卵 動物学者ウィルソンとポワーズ、ガラードの三人は冬のクロジュール岬に80軒の往復に2カ月余を費して月光を頼りに皇帝ペンギンの卵を採集に

出かけた。-50°C、眞暗な中で天幕を吹き飛ばされ、石小屋に泊ったり等して、命からがら基地に帰って来たがたった3コの卵しか採れなかった。3年後ただ一人生還したガラードが南ケンシントンの博物館に其の卵を持って行った。入口の守衛いわく「君は誰なのか。ここは卵屋ではない。卵なんかいじくり廻して何にする積りなのか。警官の所へ連れて行って欲しいと云うのか、鰐の卵でも欲しいと云うのか。わしは卵のことは何も知らんのだ」館長はガラードの手から卵を受け取って一言の礼も云わず偉い人の方を向いて話し続けた。館長はガラードのいるのに突然気がついてそれが気に入らないらしかった。「どうか、その卵の受取書を頂きたいと思うんですが」「そんなものは要らない」。館長の注意は全く偉い人の方に向けられていた。ガラードは邪魔になりはしないかと外で待つことにした。暫くたって下役が行ったり来たりしてじろじろと眺め、事務的に訊ねた。しまいにガラードは受取が欲しくて待っているのではなくて、実は人殺しをしようと思って待っているのだと気づいた。兎も角終りには受取をくれたのでガラードはそれを持って完全に紳士として行動する事ができたと思いがら帰って行った。(O1)